

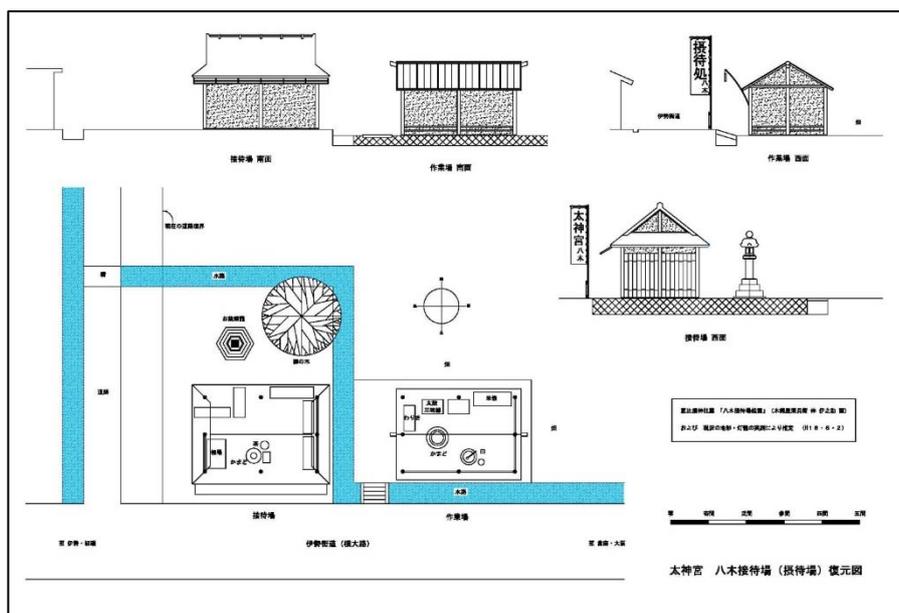
お蔭参り八木接待所文書

「お蔭参り」は、江戸時代に数次にわたって見られた伊勢神宮への民衆の集団的参宮のことで、親や主人の許しをえず、旅行手形もなく家を出たところから「ぬけまいり」なども呼ばれた。慶安三年（1650）、宝永二年（1705）、明和八年（1771）、文政十三年（1830）の四回が有名で、大規模な群参がみられ、伊勢への主要街道は群集であふれた。

このため、沿道の町や村では施行所(接待所)を仮設し、参宮の人々に対する施行に多忙をきわめた。交通の要衝八木においても施行所が設けられた。札の辻から130メートルばかり西の通称「センタイバ」(接待場の訛り)と呼ぶ一画が接待所跡である。ここには接待連中が建てた明和八年の「お蔭燈籠」が現存していた（移転済み）。この文書（絵図）は、北八木の恵比須神社に保管されているもので、いずれも文政十三年の「お蔭年」に接待所において作成されたものである。『接待所絵図』のほか『お蔭施行帳』、『施行宿人別帳』、『迷子吟味帳』など接待所の様子や活動を知る上で貴重な文献資料といえることができる。



八木恵比須神社蔵『接待所絵図』（「樫原市北八木町恵比須神社保管文書」は樫原市立図書館にて閲覧・複写可）



八木「せんたい場」復元図面 ↓北